

辺野古の基地建設計画は、1996年のSACO(沖縄に関する特別行動委員会)最終報告の中で、沖縄宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりに代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工である「ボーリング調査」が日本政府、那覇防衛施設局によって進められようとしており、それを止めるために、住民による座り込みと海上での阻止行動が連日のように繰り返されています。



### スパット台船

スパット台船を積んだクレーン船と、その航行を止めようと何度も前に割って入る小型船。ついには、クレーンでスパット台船を吊り上げ、降ろそうとしている場所に陣取り、スパット台船を設置させなかった。

## 本当の意味での辺野古・基地建設の「白紙撤回」を!

沖縄の辺野古に新しい米軍基地がつくられると決まってから、辺野古のおばあとおじいが見張り小屋で座り込みを始めて2639日(8年)。その後、日本政府・那覇防衛施設局の強行を迎えた2004年4月からは、辺野古漁港入り口前での座り込みが始まり、9月からは海上で身を挺しての阻止行動が続けられてきました。その結果、辺野古では、施設局が2004年度中に終わるはずであった63箇所のボーリング調査を、ただの一度もさせることなく、新基地建設の着工を阻止し続けているのです。この現実と、阻止行動を一貫して支え続けてきた8割を超える「普天間基地の辺野古移設反対」という沖縄の世論を前に、日米両政府は、在日米軍再編協議

において辺野古移設を再検討する姿勢を見せ始めています。

しかし、このように基地建設計画そのものが流動化している最中の4月20日、那覇防衛施設局は、これまでで最も多い12隻ものチャーター船を出港させ、新たなやぐら(ボーリングのための足場)の設置を強行しようとしてきました。そして、26日に至っては、施設局自らがまとめた「作業計画」の「作業時間を日の出1時間あとから日没1時間前までの間で設定」という規定を反故にして、午前3時から作業を開始するという暴挙にでました。その後も施設局は、深夜まで作業を続ける姿勢を見せ、住民たちは24時間体制でやぐらに泊まり込み、阻止行動にあたるという異常な

事態を強いられています。このことで、住民たち、そして施設局が雇っている作業員・漁民の双方に危険が増しているのは明らかです。

このような政府の卑劣な行為に対して、私たちは自分の足元から抗議の声をあげていかなければなりません。これは、決して沖縄だけの問題ではなく、基地建設を止めるのは、私たち一人ひとりだからです。辺野古で闘っている人たちの疲労はもうピークに達しています。今ここで、私たち一人ひとりが声をあげていくことが、この計画を止めるために何よりも肝心です。この計画は絶対に白紙撤回できます。

一緒に声をあげてください。



### 海人

辺野古の海を守るために駆けつけている困頭、東、金武、宜野座、石川の海人たち。



### 街頭アピール

署名提出行動当日には、35名の方の参加がありました。行動終了後には街頭に出て、キャンドルアピールを行いました。



### 第一次署名提出行動

1月20日、沖縄・辺野古沖でのボーリング調査の即時中止と、基地建設計画の白紙撤回を求める2700筆の署名を大阪防衛施設局に提出しました。



### 差し止め訴訟

12月27日、ボーリング調査に反対する市民や近隣海域の海人ら68人が原告となり、国を相手にボーリング調査の差し止めを求める訴えを那覇地裁に起こしました。



### 単管足場

リーフ内の4箇所建てられている単管足場には、ウエットスーツを着込んだ4~5名の方が上り、その四方には海人の船がびっしり張り付いて、施設局の作業を止めています。